

通釈『八重葎物語』（その二）

【キーワード】八重葎、中世王朝物語

妹尾好信

はじめに

中世王朝物語『八重葎』の通釈を試みた。今回はその第三回目で、『広島大学大学院文学研究科論集』第71巻（平成23年12月）掲載の「通釈『八重葎物語』（その一）」および『表現技術研究』第七号（平成24年3月）掲載の「同（その二）」に続くものである。底本には原豊二氏蔵『八重葎物語』を用い、濁点・句読点・かぎ括弧等を付す他は原文通りに翻刻して本文とした。同本は静嘉堂文庫蔵本と同系統なので静嘉堂本との異同を行間に注記し、本文の不審箇所についても行間に注記した。便宜上、『鎌倉時代物語集成』第五巻所収の翻刻本文の形式段落に従って段落分けし、各段落に通し番号と短い見出しを付した。引歌・引詩等、典拠ある表現についてのみ、訳文に*を付して注を付けた。訳文は原文を尊重したが、主語を補うなど注釈なしで通読できるよう配慮した。引歌の引用本文・歌番号は『新編国歌大観』によった。今回は、第37段落から第52段落までを扱う。

〔37〕母北の方の病氣やよくなる。中納言への心遣い

かくいふに、やよひも十日あまりに成ぬ。うへの御なやみおなじさまにてみそかにさへなれば、誰もくいみじうおほしなげくに、御いのりの僧も、今までそのしるし見えぬはおこなひのたゆきかたに人のみるらむもくちをしき心ちして、いみじう心をおこし、ずゝのをもすりきりつゝいのりさわぐに、すこしよろしう見え給へば、人とうれしう、たふとがらせ給ふに、あせうちのごひてしはぶきゐたるもしたりがほなり。中納言のきみのいみじき御心づくしにすこしおもやせ給へるを、きのふけふ物おほえ給ふほどにて、かなしと見給ふまゝに、うちなかせ給ひつゝ、「心ちはこよなくさわやかにこそおほゆれ。さりととも、このまゝにやと思ふ」など聞え給へば、「かひなく見奉り侍らましかば、いかに口をししく」と思ふ給へしに、けふの御けはひ見奉るはいふべくもあらぬよろこびになむ」ときこえ給ふ。「をしげなき命のほどを、かくきこえむは、子ならざらむ人はいかで」といひなきまさり給ふ。

「例のかたへおはしてやすみ給へ。こゝには是かれ物すれば心もとなきさまにもあらず」との給ふ。御心の中には、かのわたりの事さへおぼしいで、「いかにおぼしやらむ。すこししのびてはわたりに給ひねかし。あまり成までのまめやかさなれば、『みやづかへもすまじく。こもりぬね』と、かたじけなくの給はせし仰ごとをき、ては、わたくしのありきは中とすまじき心ばへなるぞ」などつく／＼とまもらせ給ひて、「なほわたりて物し給へ。花ども、盛ならむ」とせちにの給へば、さぶらふ人々も、「わたらせ給ひね。かばかり御心を入させ奉り給ふも、かへりてわるき事也」などきこゆれば、おはしましぬ。

〔通釈〕

こうしているうちに、三月も十日余りになった。北の方のご病氣は相変わらずで三十日にもなるので、どなたも皆ご悲嘆にくれていらつしやるのだが、ご祈祷の僧侶も、今まで効果が現れないのは修行が足りぬせいではないかと人が見ていそうなのもくやしく思つて、ひどく精魂込めて、数珠の緒も擦り切りながら大騒ぎで祈つたところ、少し持ち直したようにお見えなので、人々は嬉しく、僧たちを尊がりあそばされると、汗を押しぬぐつて咳払いしているのも、得意顔である。

中納言の君（男君）がご心痛のせいで少し頬が痩せられたのを、母北の方は一両日意識がはっきりなさったので、不憫なごととご覧になるにつけて、お泣きになり、「気分はとってもさわやかになり

ました。でも、このまま命が尽きるのではと思うのですよ」などと申し上げなさるので、中納言は、「もし万一看病の甲斐なく見奉りましたらどんなに口惜しかろうと存じておりましたのに、今日のご様子を拝見するのは言いようのない喜びでございます」と申し上げなさる。すると母上は、「惜しげもない年寄りの命なのに、こんな言葉を聞くというのは、我が子以外の人ではとてもありえないわね」と、ますます激しくお泣きになるのだった。

「いつものお部屋へいらしてお休みなさい。ここには誰や彼やがいますから、何も心配はいりません」と母上はおつしやる。ご心中には、例のあたり（葎の宿）のことまで思い出しなさつて、「どんなに気になつてらつしやることでしょう。少しはこつそりお出かけなさいよ。あなたがあまりにも生真面目なものだから、『宮仕えもしなくてよい。家に籠もつていよ』と、かたじけなくもおつしやつて下さつた帝の仰せ言を聞いては、私的な出歩きはかえつてできそうにないご性分なのですよ」などと、息子の顔をつくづくとお見つめになつて、「やはりお部屋へいらつしやい。庭の花々もきつと盛りですよ」と強くお勧めになる。お仕えしている女房たちも、「どうぞいらつしやいませ。こんなにお心遣いをおさせするのもかえつてよくないことですわ」などと申し上げるので、中納言は自室にお移りになつた。

【38】中納言、女の童を相手に戯れ言を言う

ほころびがちなるあこめ打きて、ちいさきわらはのをかしげなる、さるべき御くだ物などもて参る。「こ、さへひさしう見ざりけり」とて、御てづからみすたかくまかせ給ひて、わらはべに御あしまる(おま)りて、はしつかたにそひふし給。かたはらなるくだものをうちまさぐりつ、この子にも給はせつ、「あこはうへの御心ちのあしきはいかに見奉る。あはめ給ふに、『うれし』とや思ふ」との給へば、「いな、さは侍らず。かなしうこそ」とて、ふしめになりてかほをあかくすりなす。「いかでさはあらむ。平ちうがなみだな、りな。さらでは、くだ物のついそうならんかし」とざれごとし給ふを、まめやかに、せちにわびしとおもへるけしきのをかしくらうたきを、「なほ、わらはべこそよきなくさめには有けれ」とおほして、「よし、いはじ。にくしとおもふらむ。いとおそろし」などの給ひて、ひもときわたして匂ひみちたる花どものとりくをかしきをながめいだし給ふ。

【通釈】

自室に戻ると、あちこちはころびたあぶ相を身につけて、小さくてかわいらしい女の童が、しかるべきお菓子などを持ってくる。「この部屋さえ久しく見なかつたなあ」と言つて、中納言はご自身で御簾すを高くお巻き上げになって、女の童におみ足を揉もませて、縁の近くに横たわりなさる。そばにある菓子を手まさぐりにしながら、この子にもお与えになり、「お前は、北の方がご病気なのをどう思っ

てる？ いつも叱られているから、いい気味だと思ふかな」とおっしゃると、童は、「いえ、そんなことはありません。悲しいですよ」と言つて、伏し目になって顔をこすつて赤くしている。「そんなはずはないだろう。それは平中の涙（嘘泣きの涙）なんだろうね。そうでなければ、お菓子目当てのお世辞だろうよ」と、戯れ言をおっしゃるのを、童は本気でたまらなくつらいと思つている、その様子が面白くかわいいので、「やはり子供というのはよい慰めではあるなあ」とお思いになり、「いや、もう言わないよ。憎らしいと思つているのだろう。ああ恐ろしい」などとおつしやつて、すっかり蓄つほみが開いて色つやが充ち満ちて咲いている花々がそれぞれに美しい庭を眺めていらつしやる。

【39】中納言、榊桜につけて女君と和歌を贈答

かば桜の物よりことにすぐれてさしいでたるを、「けだかく心ふかきかたはこよなくおくれたれど、あてに匂ひやかなるかたはこのはなにやよそへてまし」となつかしうおほし出るに、恋しく、打むかはほし。すぐりひきよせつ、こまかにかきたまひて、

うつるなよよそふるからにいろも香も哀もふかき花とこそみれ「や。よもへぬる心ちのみするは、ことわりなりかし。きのふけふのほどだに『ちよしも』といへば」など、つきせぬことゝも聞え給ひて、すぐれたる枝につけてつかはしつ、なほながめおはすに、くもりなくのどかに見ゆるそらのけしきも、しづ心なくいづかたに

つけてもおほしみだるゝ心には、うら山しく見わたさせ給ふほどに、有し御かへり参らすれば、いそぎ見給ふ。

さくら花ふかきいろかを見るまゝ、になほうつろはむ事をしぞおもふ

おとにぞ人を」と、うすはなだの紙にさきぐゝよりもものなげかしげに、心とめたるかき様、もしやうなど、「すぐれたる事はなに事にも見えねど、らうたく見まほしきかたはこよなくも」と打かへし〈見給ひて、「恋しき事もなからまし」ときこえたる哥のもとを、やがて此はしに手ならひしつゝ、筆もちながらすこしまどろみ給ひに、「くるしがりがりたまふ」とあれば、いそぎわたり給ひて、いみじとおぼしたり。

〔通釈〕

権桜が他を庄して美しく枝を伸ばしているのを見て、「あの女性ひとは、気高くて深みがあるという点ではひどく劣っているけれども、上品でつやつやしたところはこの花によそえられるかなあ」と、葎の宿の女君のことを懐かしく思い出されると、恋しくて、対面しなくなつた。そこで中納言は、硯を引き寄せて、こまこまとお書きになつて、

「うつるなよ…（心変わりするんじゃないですよ。この花によそえて見ると、まったくあなたは、色香も情趣も深い花のような人ですよ。）

逢わなくなつて八千夜やちよも過ぎたような気がするの、当然ですよね。
昨日今日逢わないだけでも『千夜も逢わないようだ』と言うのです

から」などと、尽きることのない思いのたけを書き付けて、見事な枝に結びつけて女君のもとへ贈つて、そのままの思いにふけりつつ庭を眺めていらつしやると、曇りなくのどかに見える空の様子も、不安定で何につけても思い乱れる中納言の心には、うらやましく見渡しなさつているところに、使いが戻つてさきほどの歌の返歌をお届けしたので、急いでご覧になると、このようであつた。

「さくら花…（頂戴した桜の花の深い色香を拝見していますと、やはり散つてしまふことが思われてなりません。あなたのお心もお麥あはたわりになるだろうと…。）

やはり噂うわさに聞くだけでお会いしなければよかつたと思ひます」と、薄縹はなはた色の紙に、以前よりもどこか悲しげで中納言に心を寄せているふうな書きぶり、文字遣いなどを見て、中納言は、「これと言つてすぐれたところはどこにも見えないのだが、いじらしく、逢いたい気にさせるといふ点では格別だな」と、何度も読み返しつつご覧になつて、「恋こひしきこともなからまし」と、女君が申し上げた歌の上の句を、そのまま手紙の隅に書き記しながら、筆を持ったままで少し居眠りをなさつていると、「母上が苦しがつていらつしやいます」と言うので、急いで駆けつけて、これは大変だと思ひである。

*「別れてはきのふけふこそへだてつれちよしもへたるこちのみする」（新古今集・巻十四・恋四・二二三七・謙徳公）を引く。 **・

***「あひ見ずはこひしきこともなからましおとにぞ人をきくべかりける」（古今集・巻十四・恋四・六七八・よみ人しらず）を引く。

【40】中納言、出離の思い深し

「さらぬわかれはよのつねなれば、あながちなげきしづむべきにもあらず。御かたみのいろを其まゝに、やがて此よを行はなれて、いはけなきほどより思ひそめしほいをもとげて、まよひ給ふらん心のやみのしるべをもし奉り、またかくあぢきなきみのおちつくべき所も、とめてん」とおもふ道のひかりには、むなしく見奉るくちをしさはこよなくなくさむべけれど、「ことをし思ふ」ときこえし人のおもかげ、つねよりおもひ出られて、あはれにこひしければ、「われながらあさましくうかりける心のほどや。ほとけはやしゆだらぶにんをだにすてさせ給ひて、さばかりの御身さへやつし給ふに、何のかずといふべくもあらぬかけのこぐさの露のあはれにかけとめられて、こゝらのとし月思ひわたるみちをたつねで、此よもかの世もいたづらになしたらむ、是こそほとけのかたくいましめ給ふみちなれ」とこゝろづよく思ひとり給ふには、我身も残りすく。なき心地し給ふ。

〔通釈〕

「避けられない別れ、死別は人の世の常だから、必ずしも嘆き沈むべきではない。形見として着る喪服の色をそのままに、すぐさまこの俗世を離脱して、幼い頃から思い始めた出家の本意をも遂げて、迷つていらつしやるだろう母上の心の闇の道案内もしてさしあげ、また、こんなつまらない我が身の落ち着くべきところを求めよう」と思う、仏の道を照らす光として見れば、母上をお見送りする残念

さはこの上なく慰められるはずだけれども、「なほうつろはむことをしぞ思ふ」と申した女君の面影がいつもよりも強く思い出されて、しみじみ恋しく思われるので、「我ながらあきれた、情けない心の程であることよ。釈尊は、妃の耶輸陀羅やしゆたら夫人をさえお捨てになられて、あれほどの尊いご身分までやつしてしまわれたというのに、自分ときたら、まるで取るに足りない蔭かげの小草の上の露をいとしく思う気持ちに引き留められて、長い年月思い続けてきた仏の道を探ねることもせず、この世も来世も無駄にしてしまえうだ。これこそ釈尊が固く戒めなされた道なのだ」と、しっかりと悟り知りなさるにつけて、母上だけでなく我が身も余命が少ない気がなさるのであった。

*「世中にさらぬ別のなくもがな千世もとなげく人のこのため」(古今集・巻十七・九〇一・業平) による表現。 *「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰集・巻十五・雑一・一一〇二・兼輔) による表現。 *「み山木のかげのこぐさは我なれやつゆしげけれどしるひともなき」(新勅撰集・巻十二・恋二・七二三・伊勢) を引く。

【41】叔母の出発近し。大式の子供たち

かしこには、北のかた六条へうつり給へば、いとうれ。と心ばそくながめ給ふに、「此十六日なん日もよろしく侍れば、かどでしつべく」などいひおこせ給へるに、たちまちにわかれむことの悲し

さを、ことごとく（女勝）なげき給へり。大式の子どもみんなぶのたゆふはこのかみにて、廿五六にぞ見えける。これぞかのみやの御ちぬしには有ける。かたちもさるかたにあひぎやうづきはこりかにをかしきわかうど成を、すこしあさましくちをしき人のめには、なに事もめでたくかたほならずみなされて、「ち、ぬしの『あが佛』といひたるもことわりなり」ときたのかた人しれず目とゞめ給ふ。つぎくは女にて、三人有けり。ひとりはきのかみ成ける人にはやとくあはせてけり。三・四をもこ、かしこよりいひわたれど、「まだかたおひなれば、まづこの度はふようなり」といらへて、つくしへゐて行。

〔通釈〕

葎の宿では、叔母北の方が六条へお移りになったので、女君はますます手持ちぶさたで心細く、もの思いに沈んでおられるところに、「今月の十六日が、日柄がよろしいので、門出しようと思ひます」などと連絡してこられたもので、すぐにお別れすることになるのが悲しくて、女君はそのことばかりを嘆いていらつしやるのだった。大式の子供はというと、民部の大夫は最年長で、二十五、六歳に見える。この人がかの中務の宮の乳母子なのであった。容貌もそれなりに見ばえがし、自信ありげで好もしい若者なものだから、少々浅はかで情けない人（叔母北の方）の目には、万事すばらしく、非の打ちどころがなく見なされて、「父君が『我が仏』と言っているのももつともだわ」と、北の方は人知れず目をつけていらつしやる。

下に続く子はすべて女で、三人いた。一人は紀伊守であった人に、早々に娶めとせてしまった。三番目、四番目の子についても、あちこちから縁談は持ち込まれたけれども、「まだ未成熟なので、今のところは無用です」と答えて、筑紫に連れて行くことになった。

〔42〕叔母北の方、仲立ちと語らう

其日になりて、まだあかつきに北のかたおはしたり。見し人にもあらずわかやぎて、よろしききぬどもとりかさねて、いと心ちよげなり。まづなかだちのかたへ立よりて、「今日なむかどでし侍る。聞えさせしやうに、あなたに物し給ふ人をさそひたてんとて、かくまうで侍る。日頃よくたゆめおきつれば、調度やうのものもとりした、むべき心づかひもえ思ひより侍らでなむ。びんなき事なれど、ゐて行かんあとに入おはして、さるべきやうにこしらへてもたせ給へらんや。又、たらひ・ぬきすなどやうのくたくしくみぐるしき物どもは、つかひ給ふごたちのさとへものし給へ。なにのやうには侍らざなれど」なとうちわらひかたらひて、「是はたあやしう侍れど、おきづととかやいふ事のはべれば、またたいめん給はるまでのかたみに見給ばなんうれしかるべき」などいひて、綾おりもの、をかしく御衣（へり）ども取いで給ふ。

〔通釈〕

その日になって、まだ夜明け前に北の方がいらつしやうした。以前とは見違えて若作りをして、ましな衣服をとり重ねて身につけ、い

かにも気持ちよさそうである。まず、仲立ちの家に立ち寄って、「今日、門出いたします。申し上げました通り、あちらにいらっしゃる人（女君）を誘い出そうと思って、こうして参上いたしました。平生からうまく油断させておきましたので、調度の類も、整理しておくべき心遣いにも気がつきませんで……。申し訳ないですが、連れ出した後に、適当に荷造りして届けていただけませんかでしょうか。また、たらい 盥ぬきすや貫簀ぬきすなどのようなこまごまとした見苦しい道具類は、お使いになっている女房の里へお持ちください。何の役にも立たないとは存じますが」などと、笑いながら語らって、「これはまたつまらないのですが、置き土産とかいうものがありますから、再びお目にかかるまでの形見にご覧いただけましたらうれしゅうございます」などと言って、綾織物の美麗な衣類を取り出しなされた。

〔43〕叔母北の方、女君のもとを訪れ、誘い出そうとする

かねて「あかつきに」と聞え給へば、かしこにもとくおき給ひてまちおはすに、くるまのおとのきこえければ、例のしのび給へる人「いや」とたゞ今などはあるまじき事を思ひより給ふ。「北のかたおはしたり」とせうそこすれば、じゅうむかひにいできたる。「そこちをも、あすよりはいみじう恋しうこそ思ひ出め。まして姫君のおぼさなむ（れカ）、心ぐるし」といふく、おりて入ぬ。「たゞいまこそまかり侍れ。かねてかう思ひそめしみちなれど、さしあたりではなほそらよりいで來たる心ちして、たへがたくこそ。おくれさきだつ

悲しさはさらぬわかれになぐさめて、わすれぐさもしげるもの也。いけるかぎりのかゝるこそ、いのちにもまさりて心きも、うするやうにおぼえ侍れ」とて、うちなきつゝいひおはす。おやの悲しさはいかなるものともしり給はねば、さしも思ひ出給はず。たゞこの御かたをたのみ聞えて、はかなかりし身をしもおふしたてられたる人にしあれば、かゝるわかれのかなしさもいかでなのめならん。せきあぐるなみだにむせて、いらへだにはかゞくしうもつゞけ給はぬを、御かた、こゝろぐるしきさまにもてなして、「此ま、わかれ奉らむはあまりはるけ所なき心ちし侍れば、なにはまでもなひ奉りて、かゝるついでに住よしにもまうでさせ奉らむ。かつはあとのしら浪をも御覧じおくれ。うへの御心ち、まだいとたゆげにとき、給ふれば、けふ明日の中にはともおはしませじ。たとへきかせ給ひても、あしとの給はせん事にもあらず。さおほしなれ。御ものまゐらせよ。君たちもこしらへたまへ」などいひて、御だいてづからまかなひせ、のかし、かうはいのこきうすき、うちたるあやなど、くるまより取いで、これかれとかがましよういひさわぎ給ふ。

〔通釈〕

前もって叔母が夜明け前に行く旨申されていたので、律の宿でも、女君は早く起きなさって待つていらつしやうったところ、車の音が聞こえたので、「あの、お忍びでいらつしやる方（中納言）ではないかしら」と、さしあたりあるはずのないことを思い寄りなざる。「北の方がいらつしやいました」と来訪の由を告げたので、侍従が迎え

に出てきた。「あなたたちのことも、明日からはとても恋しく思い出すことでしょう。まして、姫君のお気持ちと思うと、お気の毒で……」と言いながら車から降りて家に入った。

「ただ今出発いたします。前からこのように思い始めた旅ですが、いざその時になってみると、やはり空から降ってわいたような気がして、耐え難く思われます。後れ先立つ死別の悲しさは、避けられない別れだと心を慰めて、そのうち忘れ草も茂るものです。でも、生きていながらのこういうお別れは、命の別れよりもまさって、心も肝も失せるような気がします」と、泣きながら言っておられる。女君は、親との別れの悲しさはいかなるものともご存じないので、さほど思い出しなされない。ただこの叔母君をお頼り申し上げて、幼く頼りなかつた我が身を育ててくださった人であるから、こうした別れの悲しさも、どうして並大抵であろうか。せきあげる涙にむせて、返事さえはかばかしくもお続けになれないのを、北の方は、いかにも気の毒に思うさまを装って、「このままお別れするのは、あまりにも気の晴らしようがないように思いますので、難波まで一緒にいただいて、これをついでに、住吉にもお参りさせてさし上げましょう。そして、私の乗る船のあと***の白波をもお見送りください。母上のご病気がまだひどくつらそうであらうと聞いておりますから、今日明日のうちには中納言殿もいらつしやいますまい。たとえ、難波に行つたとお聞きになつても、それを悪いとおっしゃる筋合いではありません。そうご決心なさいませ。——さあ、お食事

をさしあげなさい。あなたたちも姫君をうまく説得してちょうだい」などと言つて、叔母北の方はみずからお膳を準備して女君に勧め、紅梅なほ襲なほの濃いのやら薄いのやら、打つて光沢を出した綾織物などを車から取り出して、これやかれやと女房たちに配り、騒々しくおしゃべりになる。

*「すゑのつゆもとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん」
（新古今集・巻八・哀傷・遍昭）による表現。 *「世中にさらぬ別のなくもがな千世もとなげく人のこのため」（古今集・巻十七・九〇一・業平）等による表現。 * * *「世の中をなににたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとのしら浪」（拾遺集・巻二十・哀傷・一三七・沙弥満誓）による表現。

〔44〕叔母君、しづる女君を説得して連れ出す

「とてもかくてもおなじかなしさなり。うごくべくもおぼえ侍らず」となくくきこえ給ふに、「あないみじや。しばしにても見まほしくはおぼさで、あひなくかくきこえ給ふよ。おぼすらん人のそのほどにも物し給は、あひ奉り給はざらむくちをしさに、かく心ごはくは見え給か。『女はをどこにみゆめれば、かなしうするおやはらからもおほかたのものになり侍る』とは是にやあらん。さまではなれがたくおぼすな。此世ならず後の世もそひ給ふ御中也。ひと世にかぎるみづからをば、其かたはしだにしたひ給はで」と打むつかり給へば、おもはずにとりなし給ふもいみじうはづかしくて、たゞ

まかせられ給へり。「いづら、くるまよせよ。人とまわり給へ」など、かひなくしくいひちらして、『よの中ウチによどに』と大弐のたまはせしに、此はあけぬるは。くるまはしらせてよ』と、たゞいそぎにいそぎで、六でうにおはすれば、「などいま、でおそくは有し」などいひて、まちつる人との馬・車引つゝけて、弓・やなぐひおひたるをのこともたちさまよひて、たのもしげにみゆ。

〔通釈〕

「どこでお別れしようと、悲しさは同じです。ここを動かたいとは思いません」と、女君が泣く泣く申されると、北の方は、「まあひどい。しばらくでも顔を見たいとお思ひにならないで、情けなくもこう申されるよ。思つてらっしゃるといふ人がその間にもいらしたらお逢いできないのが残念で、こんなに強情にお見えないのですか。『女といふのは、男と関係ができると、いとしく思う親兄弟もなおざりのものになる』といふのは、このことでしょうか。そこまです離れがたいとは思ひなざるな。その方とはこの世ならず、来世でも添いなざる御仲ですよ。なのに、この世限りのご縁の私のことは、これっぽっちも慕つてくださらないで……」と不快感を表されるので、女君は、叔母君が予想外の受け取り方をなさるのもひどく恥ずかしくて、ただ叔母君の意向にお任せになられた。「さあ、車を寄せなさい。お付きの人々は一緒に参上されよ」などと、あちらこちらにかいがいしく指示を飛ばして、「夜のうちに淀に着きたいと大弐がおっしゃっていましたのに、これでは夜が明けてしまふわ。車

を速く走らせなさい」と、猛烈に急がせて、六条に到着なさると、大弐は、「どうしてこんなにぐずぐずしていたのだ」などと言つてせき立てるのだが、待つている人々の馬や車が引き連なつて、弓・箭やなを背負つた男たちが周りをうるうるして、頼もしげに見える。

〔45〕叔母北の方、女君を強引に船に乗せる

なにはわたりせうようしくして、ふねにのり給ふ。女君をまかきいだきおろして、「あだ成御心ばへをたのみ聞えて、又見ゆずる人もなきこゝのへにおはしまさせんはいける心ちもし侍らねば、おなじみちにと、かくはからひたり。物しと思ひ給ふ。『物の心もわかまへ給へば、さりともし』と思ひてなむ。御ためよろしからぬ事は思ひかまへじ。今こそ嬉しく侍れ」とうちわらひをるにぞ、御調度などももてきたる。「さはたばかり給ふにこそ」と、くちをしういみじければ、ことに物もいはれずひきかづきてふし給ふ。「思ひ給へらん心の程は、とし頃よろづにありがたく思ひしらるれば、の給はせん事をおほかたにそむき聞えむにもあらず。『かくこそはおもへ』など心うつくしう聞え給はゞ、人しれぬ哀をおもふまでこそあらめ、きしかた・行先かきあつめ思ひみだるゝばかりはいとしもなくやあらん。さるを、くまなくおぼしかまへてたゆめ給ふは、いかゞうらめしからざらむ。今より後もよろづまことしうむつびきこえむ心ちもせず、うしろめたう思ひならるゝにつけては、中としらぬ御心をたのみ聞えむは、憂もことわるかたもあらまし」と、きや

うのかたのみこひしくて、なみださへとまらぬを、又はいかにおぼしの給はんと、つゝまし。

〔通釈〕

難波近辺の観光をすべて終えて、船にお乗りになる。女君をも車から船中に抱き下ろして、「中納言殿の浮気なご性質をお頼りして、他にお世話を頼める人もいない都にお残しするのは生きた心地もありませんから、同行したいと話をつけたのです。不快にお思いですか。あなたはもの心をわきまえておいでなので、そうは言つてもわかつていただけるだろうと思ひましてね。あなたのためによからぬことは企てません。今こそうれしゅうございます」と笑つているところに、女君の調度の類が届けられた。「さては、おだましになつたのだ」と、悔しく情けないので、女君はことさらにものも言えず、衣をひき被つて伏してしまつた。「私のことを思つてくださるお心のほどは、年来、万事ありがたく思ひ知つていたので、叔母君がおっしゃることをないがしろにして背くわけではないのだ。『このように思ふのです』と正直に申してくださつたなら、人知れずあの方のお別れの悲しみを思ふのは仕方がないにしても、過去も未来も全部かき集めて思ひ乱れるほどの悲しさはまさかないだろう。それなのに、計略を尽くして油断させなざるとは、どうして恨めしくないことがあるうか。今後も一切、叔母君に心許して親しむ気にはならず、不信感を抱いてしまつたからには、かえつて頼りにしてよいかどうかわからないあの方のお心をお頼りする方が、たとえつらくて

もそういうものと納得できるところがあるのではないかしら」と、都の方ばかりが恋しくて、涙まで止まらないのを、叔母君が見たらまたどう思つて何とおつしやるかと気兼ねなさるのであつた。

〔46〕船中の女君、悲しみにくれる

有かきりの人はこゝちよげにて、「是は」「かれは」と、うみ山かけてたづねき、て、「かしこの入江にあをくなつかしげに見ゆるは、なにぞ」などいへば、「かれなむ、なにおふなにはのあしと申」とをしふるゆづをき、給ふまゝに、

「津の国のなにはのあしをふく風のそよかゝりきと君につたへよ

や、そしまかけて」など思ひつゞけられてめもあはぬに、たゞ此へだてのまぐらのほどに、聲したゝかにて物いふをとこは「大弐にや」ときくに、「有がたきまで物し給へる御有様かな。中納言どの、心ざしふかくものしたまふときゝてしかば、かたちをかくおはせんとは思ひ奉りしかど、かばかりまではおしはかられざりけり。たゆふにはかたじけなく見え給へり」といへば、北のかた、「いとうれしうの給へり。『おのがかなしう思ふまゝに、かたほならずや』とこそ思ひしに」などいひかはすをき、給ふに、今すこし心ちもきえ入ぬべく、つらく悲しきことよのつねならず。かつうくみき身ながらも、なほながらへば、かならず心ならぬよを見るべきにこそ。かう心ならずはかりごたる、身とはいかでしり給ふべきなれば、『さはお

もひつかし』とおぼしやらんむらむはづかしさは、まいてなのめなるべき心ちもせねば、この海にもまろび入ぬべくかなしきに、さたちまちにながれ出ぬも、うきにたへける命にや」とくちをし。

〔通釈〕

一行は誰も気分よさそうで、「これは？」「あれは？」と、海となく山となく尋ね訊いて、「あそこの入江に、青くて心惹かれる感じに見えるのは何なの？」などと言うと、「あれは、名高い難波の葦と申します」と教えるのをお聞きになるままに、女君は、

「津の国の…（津の国の難波の葦を吹く風がそよそよと音を立てるように、そうよ、こうだったのよとあの人に伝えておくれ。）

*八十島かけて（漕ぎ出でぬと人には告げよ）などと思い続けられて、まんじりもしないのに、ただ、この隔てがあるだけの枕元で、大声でものを言う男は、「大式だろうか」と思って聞いていると、「めつたにないほどでいらつしやるご器量ですなあ。中納言殿が愛情深くていらつしやると聞いていたので、さぞかし器量がよくていらつしやるだろうとは存じておりましたが、これほどまでとは想像できませんでしたわ。愚息の大夫にはもつたいなくお見えですなあ」と言う。すると、叔母北の方が、「はなはだうれいことをおつしやいました。私がかわいく思う欲目で不足なく見えるのではないかと思っていましたのですが…」などと言い交わすのをお聞きになると、今ひときわ、意識も失いそうなほど、つらく悲しいことは尋常でない。「こんな憂き身でありながら、なおも生きながらえていると、

必ず不本意な世を見るに違いない。こんなふうにならずにだまされてしまった身だとは、あの人はご存じのはずもないから、『そんなことだと思つたよ』と思ひ寄られるだろう」と思うと、その恥づかしさは、まして並み一通りであろうという気もしないので、この海にも転げ込んでしまいたいほど悲しいのに、それではたちまち海に流れ出てしまふかというところもいかないのも、「憂きに耐えたる命」だろうか、悔しい限りである。

*「わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟」（古今集・巻九・羈旅・四〇七・篁）を引く。 **「おもひいでたれをか人のたづねましようきにたへたる命ならずは」（千載集・巻十四・恋四・八四三・小式部）を引くか。

〔47〕女君、叔母北の方と問答

北のかたよりおはして、「などかくうもれては見え給ふ。今さらのよはひに成て、なき人のためうしろめたき心をあつかひてける道に出立待るも、たゞひとへに『きみの御行末をのどかに見なし奉らむ』と思ふばかりにこそあれ。身のあはくしきもはぶきすて、あはれに思ひいたづき奉るおのれをば、有ものともおぼした、で、あたら御身を心づからもてやつし給はんとや。をとこといふものはさのみこそあれ。わする、事はつねの事なれば。よし、聞給へ。みやこにはおぼし出る人も侍らじ。のちくは『よくいひし』とおぼしあはせんぞ。かつは、しらぬ人との見聞おも。らむ程もはづかしと

はおほさずや」と、きかるべくもあらぬ事どもを打ませうちませいひつゞけ給へるに、れいの物もいはれ給はねど、「せめてすかして、思ひたつ道だに心やすく」と思ひなり給へば、せめてためらひて、「わかれ奉らむ事をなげきわたりしより、むねふたがりてなやましようおほえ給へし。今はこゝろゆくみちにつれられ奉れば、いかにも其なごりは物し侍らねど、かゝるみちは人によりて心ちのあしきとき、しが、そのたぐひにや、いとくるしくて、いかにもおきぬられ侍らぬ」とまことしうらうたげにきこえ給ふ。かたへの人ともゑひふしてくるしがるもあれば、ましてひはづなる御身はさもやと思ひて、御物すゝめ、よろづにおほしあつかふ。

〔通釈〕

北の方が寄っていらして、「どうしてこんなにふさぎこんでいらっしやるのです？ 私が、この年になって、亡き夫に対してうしろ暗い気持ちを抑えてまで、こんな旅に出ましたのも、ただひとえにあなたの平穩な将来を拜見したいと思うばかりのことなのです。身の軽々しさも顧みずに、あなたをいとしく思ってお世話している私の存在をまるで無視なさって、せっかくの御身を、ご自分から台無しになさろうというのですか。——男というものは、所詮そうしたものなのです。女を忘れることなど常のことなのですから。まあ、お聞きなさい。都には、あなたのことを思い出される人はおりますまい。のちのちには、あの時よく言ってくれたと思ひ合わせなさることでしょうよ。それに、そんなふうになさっていて、事情を知ら

ない人々が見たり聞いたりして思うことも、恥ずかしいとお思ひではないのですか」と、とても聞いていられないようなことをうち交ぜながら言い続けなさる。女君はいつものごとくものも言えずにいらいしやるのだが、「せめて、この人をうまくなだめて、思い立つ死出の道だけでも安心して行ければ」と思うようになられたので、無理に心を落ち着かせて、「叔母様とお別れすることを嘆き続けておりますうちに、胸がふさがって気分が苦しくなりましたのです。今はもうこうして、安心な旅に連れて行っていただいておりますので、その苦しみの名残はすっかりなくなりました。でも、このような船旅は、人によつては気分が悪くなると聞きましたが、そのたぐいでしょうか、とても苦しくて、どうにも起きていられないのです」と、いかにも本当らしく、かわいげに申しなさる。周囲の人々の中にも船酔いして、横になって苦しがる者もいるので、ましてか弱い女君の御身にはさもあろうと思つて、薬湯を勧めて、北の方はあれやこれやと介抱につとめるのだった。

〔48〕女君、船中にてさらに孤立感を深める

はなれず近くそひあるしうぞ、おほし入けるほどのいみじさばかりく見しられけれど、とかうたちまちに思ひさだめ給はんとはいかと思ひよるべき。「われにてだに思ひ出る御有様のかしきは、ましてことわりぞかし」と心ぐるしければ、いひ出むにつけてもよほされ給はん御なみだのいとゞしきもいとほしくて、よろづにま

ぎらはしてことにいひ出ぬを、「これさへつれなう心づきなし」とおぼすらんかし。

「此けぶりのきえかへりたえぐに見ゆめるは、すまの浦にや」「いづら、あはちの島はいづこそ」などくちぐにいふも、さすがにかたみ、に入ば、

「もしほやくけぶりもたえぬなにをかも思ひこがる、たくひとはせむ

『わが心にこそ入め』との給ひしはまことなりけり。かつながらふまじく成行は、大かたのふかさにもあらぬを、またしらせ奉らまほし。

おもひ出る人もあらじなわびはて、あはちの島のあはときゆとも

なにはのあしのふきよらむ風につてにもき、たもふやうはあらむを、さはわれゆゑとはいかでおほさん」とおもふもかなし。なみだのところにみちて、おきもあがり給はねど、みをつくしとなりたまふ御さまは、いとあはれにをかしげなれば、大式のむすめたちもなつかしうむつびきこえまほしくて心よせきこゆるも、いとむつかしうやましけれど、「うたて心づきなきものには思ひ出られじ」と、なからむあとをおぼせば、なつかしういらへなどし給ふを、北のためやすくおもへり。

〔通釈〕

そばを離れず近くに寄り添っている侍従は、女君のご心中の深刻

さはともかくも察知できていたのだけれど、こうも急激に心をお決めになろうとはどうして思い寄れよう。「自分でさえ思い出す中納言のお姿の美しさは並々でないのだから、まして女君が執着なさるのも無理はない」とおいたわしいので、中納言のことを口にするにつけても女君がいつそう涙を催されるのがお気の毒で、何かと紛らわして特に言い出さないのを、女君は、侍従までが冷たく、気に入らないとお思ひのことであろうよ。

人々が、「この、煙が消えがちでとぎれとぎれに見えているようなのは、須磨の浦かしら」「どれ、淡路の島はどこかな」などと口々に言うのも、さすがに片耳に入るので、女君は、

「もしほやく…(藻塩を焼く煙も絶えてしまいました。いったい何をあの人を思い焦がれる私の心の類とすればよいのでしょうか。)

『深いところを尋ねたら、私の心に入るようになるでしょう』とあの人がおっしゃったのは本当だった。こうして生き長らえられそうになくなっていくのは、並大抵の縁の深さではないことを、またあの人にお知らせ申したいものだわ。

思ひ出づる…(思い出してくれる人もいないでしょうよ。私が苦しみ抜いて、淡路島の近くで泡のように消えてしまっても。)

難波の葦に吹き寄る風の便りにも、お聞きになることはあるだろうけれど、それが自分のせいだとはどうしてお思ひになるのか」と思ふのも悲しい。涙が床に満ちて、起き上がりもなさらないのだが、海中の漂標たづなのようにおなりになるご様子はますます心惹かれて魅力

的なので、大武の娘たちも、女君と親しくお付き合いたくして心を
お寄せするのも、女君はとでもわずらわしく嫌なのだけれど、ひど
く気に入らない人だったとは思いい出されたくない、自分の死後の
ことをお思いになるので、親しく返答などをなさるのを、叔母北の
方は感じのよいことと思っていた。

* [27] で中納言が発した「ふかき所をたづね給は、わが心にこそ入
給ふべけれ」の言葉をさす。 * 「君こふる涙のここにみちぬれば
みをつくしとぞ我はなりぬる」（古今集・卷十二・恋二・五六七・興風）
を引く。

〔49〕海上荒れる。船は明石の港に繫留

明石へ今時の間とみゆるに、にはかに風のけしきあやにくにふき
いで、山かなにぞとみゆる浪のひまなくうちかけて、おきもいと
くらう、そこ所とも見えず。船は今たゞ海のそこにしづみぬべくて、
いみじうくるめきたるに、わびしき事いひしらず。ふねの内、かみ
しもこぞりて、わらはべ・女ぼうなどはまだきになきの、する。又
なくいみちとおもへど、かちとりはいさ、かこと、もおもひたらぬ
さまにて、ほをとりおろし、ろどもおしたて、とかくさわぐを見る
なむ、たのもしかりける。

げに、ことなくみぎはにふねこぎ入てつなぎければ、たれもく
今ぞいきいでける心ちしける。おなじ風にて三四日もすぐれば、「所
せきふねのうち、くるし」とて、「やどり。いで、ゆするなどせん」

とて、大武も北のかたもあがり給へり。

〔通釈〕

明石へもうまもなく到着と見えた時、にわか風が激しく
なり、山か何かと見える大波が絶え間なく船にうちかかって、沖の
方も真つ暗で、そこがどこともわからない。船は今にも海の底に沈
んでしまいそうで、激しく旋回するので、言いようのないつらさで
ある。船中では身分の高下を問わず一所に集まって、子供や女性た
ちは早くも泣き騒いでいる。最悪のつらさだと思ふのに、船の楫取
りは、いささか動じたふうもなく、帆を取り下ろし、櫓を押し立て
て、何やら大声で騒いでいるのを見ると、頼もしい限りであった。

実に、難なく海岸に船を漕ぎ入れて繫留したので、誰もみなやっ
と生き返った気持ちになった。同じような風が吹いて三、四日も過
ぎるので、窮屈な船中では苦しいと言つて、「宿を取つて、潮風を
受けた髪を洗おう」と、大武も北の方も上陸なさつた。

〔50〕女君、死を覚悟して反故の類を処分する

君をもいざなへ給へど、いみじかりしさわぎに、いと有かなき
かに成給へば、「今しもかきみだれて」ときこえ給ふ。しひての給
ふをはくるしとおぼしたれば、こと君だちばかりひきつれ給へり。
おくれじときほひあらひてこ、ちよげなるも、いとうら山し。じ
うぞのこりあるを、心ちもよわくおほゆれば、「のこりてかたはな
らむほうぐども、やりすてん」とおもひ成て、せちにそ、のかしや

り給ひて、いとくるしきを、せめてためらひおき出て、近きてう度より、つれづれなるまゝにはかなく書あつめたるもしほぐさどもとり出給ふに、かの御手なるふみの三つ四つ有を、ことごとくよりもなつかしうてひき明給へるに、をかきふしもあはれなるふしもさま／＼見所おほくかきなし給ふは、かゝらぬ人だにあはれとみむを、まいていかでかあさかるべき。せきあへぬなみだにもじもながれぬべし。

「其よにかゝるわかればわかればおもひかけざるき。今はうへの御心ちもよろしからむ。おはしやし給ひけむ。あたにおはすと人とは聞えしらすれど、心にはさしもおもはず。わすれやし給ひけむ。『さりともおぼしいづる事もあらむ』と思ひやらるゝは、わが心のならひにや。ぬるよなければ、夢にさへ有しよはみず。またなき物にき、わたりし御しらべもきかず成にしよ」などか／＼おもひつゞくるに、みぎはまされば、中と見さして、こまかにひきやりて海におとしつゝ、

思ひきやかきあつめたることの葉をその水くづとなして見む
とは

とて、袖をかほ(ゆげ)におしあて給へるに、御心ざしの山ぶきなるも、いと心まどひして、

恋しともいはれざりけり山吹の花色ごろも身をしさらねば
となく／＼かきつけ給ふ時しも、みんなの大夫よりくる。まほならねど御有様をみてければ、人とのなき折を「よきひま」と思ひて、

けさうする也けり。

〔通釈〕

女君をもお誘いになったが、ひどかった騒ぎのせいで、ますます生きているのかいないのかわからないさまになられたので、「今はとにかく気分が悪くて……」と申し上げなされる。無理に上陸を勧めるのは気の毒とお思いになったので、大貳は、他の子供たちだけをお連れなられた。子供たちは遅れまいと競い合つて船を下り、気分よさそうなのも、女君にはとてもうらやましい。船には侍従が残っていたのだが、女君は気持ち弱つてしまったので、亡き後に残つてはみつともない反故(ほご)の類を破り捨てようと思つようになつて、侍従に強く勧め上陸させなさり、自分はひどく苦しいのをなんとか我慢して起き出して、近くにある調度から、手持ち無沙汰なままにはかなく書き集めた書跡の類を取り出されると、かの中納言の筆跡になる手紙が三、四通あるのを、他の何よりも心惹かれて、開けてご覧になると、楽しい時も悲しい時も、さまざまに見どころ多くお書きになっているのは、こんな境遇にある人でなくてもしみじみ心打たれて見るであろうのに、まして女君は感慨が浅かろうはずがない。せき止めきれない涙が降りかかつて、文字も流れてしまいそうである。

「あの頃は、こんな別れになろうとは思ひもかけなかった。今は母上のご病氣もよくなられたらう。私の家にいらしてくれただかしら。浮気な人だと人々は忠告してくれるけれど、私にはそうは思え

ない。もうお忘れになっただろうか。『たとえふだんはお忘れでも、思い出してくださいることもおありだろう』と思いやつてしまうのは、いつも中納言を恋しく思う私の心の習慣でしょうか。この頃は寝る夜もないから、夢にさえあの頃のこととは見ない。並ぶ者がない名手と評判の琴の調べも聞かないままになってしまったことよ」などと、あれこれ思い続けると、こぼれる涙で汀がまさるので、見ているとかえつてつらく、見るのをやめて、細かく破つて海に落としながら、

思ひきや…（思ったでしょうか。木の葉を掻き集めるように書き集めた言葉を、底の水層としてしまつて見ることになろうとは。）

と詠んで、袖を顔に押し当てなさつたところ、その袖が中納言から贈られた山吹の衣であるのに気がついて、ますます狼狽して、

恋しとも…（恋しいとも言えないのですね。口なし色である山吹の花色の衣が我が身を離れないので。）

と、泣く泣く書き付けていらつしゃる、その時、民部の大夫が近寄つて来た。はつきりではないけれど、女君のご容姿を見たので、人々のいない折をうつつつけの機会と思つて、懸想しに来たのである。

*「夢にだに見る事ぞなき年をへて心のどかにぬるよなければ」（後撰集・卷九・恋一・五三八・よみ人しらず）または「こひしきを何につけてかなぐさめむ夢だに見えずぬる夜なければ」（拾遺集・卷十二・恋二・七三五・順）を引く。 **「きみをのみなみだおちそひこのかはのみぎはまさりてながるべらなり」（古今六帖・第四・三三四五）を引く。 ***「山吹の花色衣ぬしやたれとへぞこたへずくちなしにして」

（古今集・卷十九・誹諧・一〇二二・素性）による表現。

【51】民部の大夫、女君に言い寄る

いとゞかきくれまどふに、今ぞまことに消はてぬべき。いとゞひきかづきてまろびのき給ふ。、「などかくいぶせき御もてなしぞ。むかしの御かはりにおほしなずらへよ。御有さま・もてなしにこそはしがはしにもあらざめれ、ふかき心ざしのほどはまけ奉らじ。何かうとみおほす。この國へ行し女も侍らずや。其たぐひにもおほしよわりて、一こと御聲をだにきかせ給へ。つれなくかけはなれ給ふとも、かばかりもらしそめ侍れば、はかなき御心にすかされてやむべきにも侍らず。此たのもし人にし給ふ人の御おもむけもゆるしきこえむとおほし成てこそ、かく御心ゆかぬ道にも物し給へ。つひにはのがれぬすくせとおほしよわれ。いはにも松はおひずや侍る。をかしき浦のけしき、山のたゝずまひをも御覽ぜよ。繪にかきたらむのみめなれ給へらんに、まことのけはひにながめくらべ給へ。所とをもをしへ奉らむ。かうのみしづみ給ひては、いとゞかきみだる、物に侍り。ひたぶる心はつかひ侍らじ。うとましきものにはおほさで、うしろやすくおほし成て、おほすらん人の御上をもかたり給へ。なにがしが母なん中つかさの宮の御めのとにて物し給ひてしかば、其ゆかりにかのみやにはしたしくつかうまつり侍る。此御思ひ人なむ、いとよき御ながらひにてきこえかはし給へば、おのづからなれ奉りて、なつかしき御けはひもいとよくみしりて侍り。かゝる御中

をかけはなれたまひて、なにがしがめなど聞えさせんは、おもへばかたじけなしや。さるは、さきの世のすぐせもおろかならず思ひしられて、かつはかなきおのが身も心おごりせらるゝにや、此なめげさを御覽せさする」などさまさまきこえつゝけれど、きかれ給ふべくもあらず。いとむくつけくわびしくて、あせもなみだもながれいづ。「さるは、かの思ひかけざりし秋の夕は、かばかりにやまどひし。にくき心哉」とみづからおほししらる。

〔通釈〕

ますます目の前が真つ暗になり心惑つて、女君は今や本当に死んでしまいそうである。衣をさらに引き被つて転がるように身を避けなざるのを見て、大夫は、「どうしてそんな嫌なお振る舞いをなさるのです？ 昔の男の代わりとお思いください。ご容姿や身のこなしこそ、遙かに劣っておりましょうけれども、あなたを思う深い愛情のほどは負けまいと思います。なぜお嫌いになられる？ 不本意ながら胡の国に行った女（王昭君）だっているじゃないですか。あなたもその類だと観念して、一言お声だけでも聞かせてください。冷たく突き放しなされても、これだけ意中を漏らしましたからには、あなたのしつかりしないお心に騙されて引き下がるわけにも参りません。あの、あなたが頼りにしていらつしやる叔母君のご意向も、受け入れようと思われたからこそ、こうして意に染まない旅にも出て来られたのでしょうか。最後には逃れられない宿世なのだとおあきらめなさい。岩にも松は生えないでしょうか。美しい海辺の景色や

山のたたずまいをもご覧なさい。絵に描いた風景だけ見慣れていらつしやるでしょうが、本物の風情と較べ合わせてください。あちらこちらの名所をも教えてさしあげましょう。こんなふう沈んでいらしては、ますます気分が悪くなってしまうものです。無理無体な心はおこしません。疎ましい者とお思ひにならないで、ご安心なさつて、あなたが思つていらつしやる男のこともお語りなさい。私の母が、中務の宮の乳母でいらしたものですから、その縁で、その宮様には親しくお仕えしております。そのあなたの思ひ人は、中務の宮とは大の仲良しで、互いに親しくおつきあいしていらつしやるので、私も自然とお慣れ申しまして、親しみ深い中納言のご様子も、とてもよく拝見しております。そのような方との仲をお離れになつて、私めの妻などと申し上げるのは、思えばもつたないことです。

そうであるのは、前世の宿世も並々でなく思い知られまして、こんな取るに足りない我が身もつい得意になつてしまうのか、こういう失礼な振る舞いをお見せしてしまうのです」などと、さまざま申し続けるのだが、女君は聞く耳をお持ちのはずがない。ひどく気味が悪くこわくて、汗も涙も一緒に流れ出る。「それにしても、あの思いがけず中納言殿が忍び込まれた秋の夕べは、これほどには惑わなかった。我ながら憎らしい心であることよ」と、女君はみずから、中納言と民部の大夫の違いを思い知られなざるのであった。

*「たねしあればいはにも松はおひにけり恋をしこひばあはざらめやは」（古今集・巻十一・恋一・五二二・よみ人しらす）を引く。

〔52〕侍従が戻つて女君は危機を逃れるも、衰弱を極める

このかず／＼いひあつむる中にも、かの御うへは耳とゞまりけり。「なに、侍従をはなちやりつらむ」と、くやしき事さへやるかたなくて、いよ／＼かほをひき入て、たけき事とはねをのみなき給ふを、見きこえむとうへの御ぞかなぐりひきしらふ程うらにぞ、侍従帰りに来る。此人のみるらんをはかりきこゆべきにもあらねど、うちつけなるさまをみえむもさすがにまばゆくをこがましくて、いでなむとす。

見るめかるかたないといひそかばかりにぬる、はあまの袖とこそ
みれ

など、したりがほにいひてたち出るにぞ、この御もとは、「さなり」とおもひて、「こは、あなむくつけ。御心ちあしきあたりに、いとゞかきくれておほさむ、いとほしく」といふ／＼入きて見奉れば、なき人のやうに物し給ふ。

御ぞひきのけ、ぬれたる御まみのほどひきつくろひ、御ゆ参らせなど萬に心みるに、有かなきかにきえ入つ、たのもしげなく見えたまへば、おどろきさわぎて北のかたへもつけやりけるに、まどひおはしてみ給ふに、まことにつねよりよわく、今とみゆれば、「いかさまにせん」とおもひなげく。

〔通釈〕

民部の大夫があれこれしゃべり散らした中でも、あの中納言に關する部分は耳が留まった。「どうして侍従を離れて行かせてしまっ

たのかしら」と悔やむ気持ちまで晴らしようがなくて、女君はいよいよ顔を衣に引き入れて、精一杯できることとしては声を上げてお泣きになるばかりなのを、民部の大夫は顔を見せていたどころと被っている衣を乱暴に引きはがそうとしているところに侍従が戻つて来た。大夫は、この人が見ていようと遠慮する必要はないのだが、唐突なさまを見られるのもさすがに恥ずかしく、ばかげているので、出て行くこうとする。その時、

みるめかる…（契りを結ぼうとする私を嫌わないでください。あなたの袖がこんなにもぐっしり濡れているのは、湯かたで海松布みるめを刈る海女の袖だと見えますよ。）

などと得意顔で言つて出て行くのを見て、この御許おもと（侍従）は、「この男が姫君に近づいたようだ」と思つて、「これはまあ恐ろしい！ご気分が悪いところに、ますます恐怖と悲しみにくれていらつしやるでしょう。おいたわしい」と言いながら、部屋に入つて来て拝見すると、女君はまるで亡き人のやうにぐったりしていらつしやる。

被っている御衣おんぞを引き除のけて、濡れた目もとのあたりを拭き整え、薬湯をさし上げたりなど、さまざまに介抱してみるのだが、女君は生きているのかいないのかわからないように意識がはつきりせず、頼りなくお見えなので、侍従が驚き騒いで、北の方へも知らせにやつたところ、慌ててやつて来られてご覧になると、本当に、普段よりも衰弱して、今はまわの際に見えるので、「どうすればいいのかしら」と、思い歎くのがあった。

（以下、続稿）

A Complete Translation of *Yaemugura-Monogatari* (Part Ⅲ)

Yoshinobu SENO

It is generally said that *Yaemugura-Monogatari*, one of the tales in Middle Dynasty of Japan, is a short one but its story is very coherent, and it is considered to be a good piece of work in terms both of plot and style. However, no complete modern translations of the tale have been published.

This paper attempts to modernize the tale, based on the recently found manuscript which is in the possession of Toyoji Hara. Due to space limitation, only the third quarter of the whole tale is dealt with in the present paper.